

5 【うわん】

月は赤く、風はなまぬるい。

こういう夜に、無事（ぶじ）だったためしがない。

やっぱり、古い家の近くを通りかかると、〈うわん〉と大声でおどかすものがいます。

ほんとうは〈うわん〉ではなく〈うおお〉かも。

〈うわあ〉かもしれない。

昼間やにぎやかな日には、よくきこえなくとも、静かな夜だからよくきこえる。

こいつには、よくやられたものです。

ぼくが、静かな夜に、よくでかけるせいかもしれない。

古い家の近くを、よく通りかかるせいかもしれない。

おどかすのではなく、その家にはくるった人が住んでいて、ときおり叫ぶのだろうと、ぼくはおもっていました。

じっさいぼくは、くるった人を、何度かみたことがありました。

くるった人は、村役場の屋根の上に登ったり、火の見やぐらに登ったり、日の丸をかかげた棹（さお）の先に登ったりしていたから、そうして高見の見物しながら、ときどき変な声をだしていたから、それなんだろうとおもっていました。

それでもいちおう、懐爺にきいてみたものです。

懐爺は、こう丁寧（ていねい）に、説明してくれました。

「それもやはりおぼけなんです。くるった人ではなく【うわん】というおぼけ。金ちゃんに〈うおお〉ときこえたなら、〈うおお〉でもいいんだけれど、おそらく〈うわん〉ときこえた人が多かったんでしょうね。むかしのわたしには、〈いやん〉ときこえましたよ。〈いやん〉ではおぼけにならないかもしれないけれど」

「【うわん】は、なんか、わるさするんかいな」

「金ちゃんは、何かされましたか」

「わしは、されん」

ぼくはいばりました。

「【うわん】は声だけのおぼけなんですよ。でもおどろいたでしょう、大

きな声ですからね。人をおどろかすのが、【うわん】のわるさなのです」

「そんならいのわるさなら、わしなんかまいどじゃ」

「金ちゃんは、【うわん】もおどろく、おばけちゃんかもしれませんね」

そういつてから、懐爺は笑いだして、なかなかとまりません。

ぼくは、笑い事じゃないと、むくれていたものです。

むくれたついでに、きく意味のないことを、ききました。

こどものぼくなり、懐爺にたいする嫌味（いやみ）だったのかもし
れない。

「ほんまに、おばけなんかいるんかい」

「いますよ」

懐爺は、すぐに答えました。

かんがえるそぶりも、みせませんでした。

「やっぱし、いるんだ」

「もしおばけがいなかったら」

懐爺は口ごもります。

「いないとしたら、なんじゃい」

「この世は闇（やみ）ですよ」